

「対話」がもたらす深い学び

横浜国立大学教授
高木まさきたかき

「対話」を巧みに位置づける

宗我部先生の授業には、生徒の中から生まれる言葉によって、筆者の言いたいことに向かつていく「対話」が巧みに位置づけられています。「対話」は、アクティブ・ラーニングで重視されている視点の一つです（※）。

第五時で、先生が生徒たちの発言を関係づけていったことで、彼らは主体的に、テキストと、そして自己と対話し、その中で生まれた疑問を、友達との対話によって解決していきました。授業後、彼らが筆者の他の本にまで手を伸ばした（P13）のは、自分の常識を覆してくれた筆者に魅力を感じたからでしょう。つまり、生徒には、文章の向こう側にある筆者像がイメージできていたのです。これは、授業に深い学びがあったからこそ、もたらされたことだと思います。

深い「読み」を展開する

深い「読み」とは、文章の中に、結論を導くための言葉の関係をより多く発見することだといえます。「誰かの代わりに」では、『パンセ』の言葉を最後に読んでなんとなくわかるのではなく、これを「自立」「責任」など他の言葉と結び付けて、より深く理解するということです。今回の授業では、まさにそうした「読み」が展開されていました。

この教材は、筆者なりのものの見方を提案することで、自明のものの方を見方を問います。宗我部先生による手立て、二つのキーワードについて考えさせる・生徒の疑問・発言を関係づけるは、この教材の本質を捉えたものでした。だからこそ最後の話し合いが、文章中のあらゆる言葉が関係して一点に集中していくようなものになっていったのです。

生徒をよく知っておく

この授業は、教材研究はもとより、生徒をよく知っておくことなしには成り立ちません。宗我部先生は、カードや机間指導を通して、生徒の話し合いをしっかりと把握していました。そして、それをもとに、話し合いでの軌道修正を行っています。おそらく、この時間を通して、先生ご自身も読み深まっていった部分があるのではないのでしょうか。先生と生徒たちとの間に、対話的な関係が見て取れることの鍵は、ここにあるのかもしれません。

教材に刺激を受けて、大いに考える。授業では、生徒といっしょに、ぜひそんな体験を試してみたいと思います。（談）



1958年、静岡県生まれ。横浜国立大学教授。中央教育審議会国語ワーキンググループ委員、全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議委員などを歴任する。「ことばと学びをひらく会」会長。著書に『「他者」を発見する国語の授業』（大修館書店）など。光村図書 小学校・中学校「国語」教科書編集委員。

※ 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（中央教育審議会）参照。